

---

# だから、もうやめてくれ(仮題)

並中半平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だから、もうやめてくれ（仮題）

### 【Nコード】

N3999Z

### 【作者名】

並中半平

### 【あらすじ】

トラックに轢かれそうな少女を見殺しにした青年は、きがついたら魔物が跋扈するファンタジーな異世界にトリップしてて……

読者のために（前書き）

読者のために、本書の内容を、できるだけわかりやすく、そして、できるだけ詳しく、お話ししたいと思います。

## ぶるるーぐ

僕の前で見知らぬ少女が死んだ。トラックに轢かれ、弾かれて。バラバラになって。

見るも無残な姿を曝してコンクリートの上に横たわっている。

何事かと人々が遠巻きに事故現場を囲み、写真を取り出す。

野次馬根性大爆発。

僕はそんな彼らから離れるため、背を向けて立ち去った。

いや、正確には立ち去ろうとした。出来なかったのだ。

僕の服の裾を掴む一人の少女によって。

「……………し……………?」

無理やり絞り出したかのような細かい声だった。

「……………うし……………?」

僕の反応が良くなかったからだろうか、少女はまた何かを発した。

「牛?どうでもいいけど、服、離してくれないか?伸びちまう」

「」

今度ははっきりと聞こえた。

どうして助けなかったのか、と。

トラックに轢かれそうだった少女を僕が気がついていて助けなかったと思っっているのだろう。まさにその通りだ。

正確には助けようとさえ思わなかった。

「あなたに救われていれば彼女は救われていた」

「そりゃねえよ。トラックからは助かっても、あの少女の人生は救われないものになっていただろうよ」

「あなたが代わりに死んだら負い目を感じるから？」

「それもあるかもな」

「たったそれだけが助けなかった理由？ たったそれだけが彼女が死んだ理由？ 貴方は彼女のために彼女を見殺しにしたというわけ？」

「いや、そんな危険な思考は持ち合わせちゃいねーよ。生きたくて救われないけど、死んだからって救われるとは限らねーんだからよ」

「じゃあ、？」

「他人の為に死ぬなんてご免だろ？」

目の前の少女は一瞬、驚いたように目を見開いた。

そんなに奇想天外奇天烈爽快なことを言っただろうか。至極、最もなことを言っただつもりなのだけれど。

大体そうだろう。家族や親友、恋人に恩師だとしても自分が代わりに、なんて思うことはない。

見知らぬ誰かを助けるなんて仏陀か転生系の小説の主人公くらいしか思いつかない。

だから、僕は少女を見殺しにした。

酷い人間だと思わないでくれ。これが人間だ。人間なんて自分が助かればいいのだ。

「可哀想な人」

「何とでも言え。ところで訊きたいことがあるんだが、構わないか」  
「なんでもどうぞ」

「なら遠慮なく。どうしてお前は轢かれてバラバラになったはずの少女と同じ顔をしているんだ？」

「彼女は私で、私は彼女だから」

「クローンかなにかか？」

「違う。けれど、違くもない」

まるで意味がわからない。それに、死んだはずの少女がここにいることに誰も何も思わないのだろうか。

気になってそちらに目を向けると野次馬に溢れかえっていた筈の道路は人っ子一人いなくなっていた。

事故を起こしたトラックも轢かれた少女さえ。何ひとつとして。

「訊きたいきとはそれだけ？」

「ちよつと．．．．．」

待て。

言い切る前に少女は僕の服から手を離し、光の粒子となって消えて行った。

途端。

街は喧騒を取り戻した。遠くからパトカーと救急車のサイレンが聞

こえてくる。

何だったんだ。あれは。まるで夢だったかのようだ。

「まあいいか。今日は早く帰って寝よう」

明日も学校だし。

服の裾にできた皺だけがどこか現実味をおびていないように思えた。

## ぶろろーぐ（後書き）

導入の導入部分ととしてかなり短めに仕上げました。  
誤字脱字、意見感想がありましたら是非ともお教え下さいまし。

## 何時の間にやら森の中

僕が少女を見殺しにした翌日。こう書くと僕の人格が疑われそうだから、僕が交通事故を目撃した翌日。

日差しの眩しさに目を開くと、真上にある太陽から真っ直ぐに照らされていた。

僕の部屋にも天井があったと思ったが……

というか、いくらボロボロで家賃2・8万のアパートだとしても天井がなくなるなんてことはない。少なくとも文明の発達した21世紀の日本では。

ついでに言うと壁も、ベッドもない。まあ、ベッドは元からないけれど。

壁がないということはつまり、今どこにいるかが分かるということだ。

普通なら。

寝ぼけて近所の公園か何処かのベンチで寝てしまったのかと思ったが、どうも違うみたいだ。

我が家の周囲には人工林のある公園がちらほらとある程度だが、この人工林はこんなに青々と茂っていない。

まるで何処かの樹海に迷い込んでしまったかのようなようだ。

「さてどうしたものか」

顎を撫でる。僕の癖だ。考えごとをするときはいつも無精髭を撫でるのだ。

が、

「ん?」

髭がない。切り揃えることはあっても剃ることなどない髭が綺麗さっぱりなくなっていた。

「どういうことだよ、おい」

当然のように僕に伝えてくれるものはない。足元を蟻の行列が横切っただけだ。

本当に静かな森だ。

都会の喧騒が全く聞こえて来ない。昨日、不可思議な少女と言葉を交わしていた時に似ている。

随分と人里から離れてしまったのか。例の少女が近くにいなからなのか。

と、

パーン

僕の思考を遮るように乾いた破裂音が聞こえてきた。

「逃げたぞ」「そっちだ、そっちにいった」「捕まえろ」「追いかける」

続いて男たちの怒声が聞こえてきた。

助かった。

柄にもなくそんなことを思った。人は助かりも救われもしないと思っていたのに。

ともかく、僕は声のした方へ駆け出した。

暫くもしないで目の前の草むらがガサガサと揺れた。

ああ、これで助かったと思った。思ってしまった。

が、草むらから出てきたのは人ではなくイノシシのような生き物だった。しかもやたら大きい。

僕は日本人男性の身長平均よりはあったと思うがそれよりも少し大きく感じる。

それが猪突猛進といったように僕に向かって走って来ていた。

ヤバイ。

思うより早くイノシシは僕の目の前まで迫っていた。  
ぶつかる。死んだな、これは。

刹那。

僕とイノシシは正面衝突した。さながら昨日の少女とトラックと同じように、力も持たない弱者と圧倒的な暴力とがぶつかったのである。

勿論、弱者たりえたのは僕の方だったはずなのだけど。

何故かイノシシは硬い壁にぶつかったかのように顔はひしゃげており、牙も半ばからポツキリと折れていた。

「はあ？」

何だこれは。何が起こったんだ。

思わず体を庇おうと前に出した腕を見た。

黒かった。普通の黄色人種に比べてという訳ではなく、褐色系の黒さだった。

それにちよつと、どころかかなり小さい。子供のそれのように。

「どうなってんだよ、これは」

茫然自失で立ちすくむ僕と、獵師然とした男たちがひしゃげたイノシシを挟んで会合を果たした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3999z/>

---

だから、もうやめてくれ(仮題)

2011年12月15日00時51分発行